

特集
藍より青き吉野川
川と人のかかわり

Special Features
The Blue Color Yoshino River rather than in Color Indigo
Mankind and the River

吉野川と人のかかわり
Mankind and the Yoshino River

吉野川…その源流では

岩崎憲郎

IWASAKI Kenro

大豊町森林組合/専務理事



1 川はみんなの遊び場

吉野川、まず幼いころの思い出が、脳裏に浮かぶ。緑の山並みを縫うように流れる吉野川、その流れを一望できる山肌へはりついた農家に生まれて、半世紀を生きた。その間、このふるさとを離れることはなかった。

子供の頃はよく吉野川で遊んだ。テレビゲームなどない、山や川が遊び相手の時代であった。吉野川は、子供たちの冒険心や好奇心を駆り立てるすばらしいフィールドだった。

幼い僕たちは、吉野川で多くの冒険を体験したし、また子供心をワクワクさせるたくさんの発見があった。子供たちにとって、川はなくてはならない遊びの場であった。

今でも自分たちが遊んだ自宅近くの川でどのあたりに潜れば、どんな岩があり、そこにはどんな魚がいるかというような流れの中の状況まで、目をつむれば頭の中ははっきりとうかんでくる。



写真1 - 昔と変わらない吉野川の流れ

毎日よく行った。友達もみんなそうであった。川に行けば遊びは見つかるし、友達がいた。釣りや、潜っての魚突きなど、大きな魚を仕留めることをみんなで競い合った。そのためには練習もしたし、無理もした。川の達人になることが、勉強よりも大事な時代であった。

2 「ブラックバス」が仲間入り

春に始まるフナ釣り、よく行ったのが自宅から少し吉野川を下ったところにある池だった。池と言っても河原にできた直径30メートルぐらいの水たまりだ。川が増水すると流れの中に沈んでしまうけれども、川の水が普通の状態になると池となる。そして、よくフナなどがいた。

釣りのえさは、ミミズ、小麦粉を練ったものや虫など各自が工夫して利用した。

休日には、友達がこの小さな池によく集まり、時間を忘れてフナ釣りに熱中した。

そして、釣りの合間に河原の探検、広い河原には大小の水たまりがたくさんあり、増水の際に逃げ遅れた魚がいたり、石亀がいたり、結構楽しい冒険ができた。小さな水たまりで、生まれたばかりで甲羅の柔らかい小さなカメが数匹見つかったり、またあるときは鳥の巣を発見したり、河原の探検には実に楽しい出会いがあった。

川での一日は時間があっという間に過ぎ短かった。それ程に夢中にさせてくれた。

みんなを夢中にさせてくれるのはフナであったが、ハエ(オイカワ)など、ときにはカメも釣れた。

この池に十年くらい前、自分の子供と一緒に釣りに行った。何と釣れた魚が、ブラ

ックバス、ブルーギルだった。これには驚いた。こんな魚はいなかった。「昔いた魚たちはどうしたのだろう。」と思っていたらフナもいる、ハエもいる。

しかし、子供たちを夢中にさせてくれる釣りの主役の座はブラックバスに奪われていた。竿を足下に置き、水面にブツカリと浮くウキを息を潜めて見つめ、時間を忘れて没頭する釣りは忘れられていた。

スポーツフィッシングと言われるように、まさにスポーツだ。

我々の知らなかった世界だが、チャレンジしてみるとバス釣りも楽しい。しかし、子供のころの釣りとは全く違う。

3 姿を消した「ヤツメウナギ」

春先、ヤツメウナギが一斉に上流に向かって上り始める。夜間群れをつくって上るヤツメウナギを網ですくい捕る。急流で強い流れを避けて川岸近くを通るところを狙うが、岸からすくい捕ることのできるポイントが非常に少ない。

ねらいを定めたポイントに陣取り、日の暮れるのを待つ。この場所取りでその日の漁が決まるため、友達みんなが早い者勝ちの場所取りに昼間から必死だった。

漁に欠かせない照明は、カーバイトから発生するガスを燃やすランプ。これが実にいい。水面に反射しない明かりで、水中を素早く泳ぐヤツメウナギがはっきりと見える。

暗やみの中、カーバイトの光を頼りに上流に向かって泳ぐヤツメウナギを小さな「ブツタイ」という手作りの網で

素早くすくい捕る。この「ブツタイ」はゴリ漁などに使うものと比較して網の部分が小さくて、柄の部分が長い。金網と針金を買ひ、裏山で竹を切り、自分で作る。みんな自分で作るから、網の部分の大きさや柄の長さに個性がある。これを作るのも楽しみのひとつだった。

また、夏場、水辺の砂を両手にいっぱいすくい、乾いた砂の上に置き、少しずつ水をかけて洗い流すとヤツメウナギがよく捕れた。大きいものに混じって、小さい幼魚もよく捕れた。

このヤツメウナギがすっかり姿を消した。

4 子供たちの姿が川から消えた

川には多くの遊びがあった。

夏近くなると、「釣りつけ」をよく仕掛けた。主にウナギを捕る仕掛けた。夕方仕掛け、朝早く漁に出る。えさは「ゴリ」。吉野川に注ぐ小さい谷川で「ブツタイ」ですくい捕る。そのえさを針にさして沈め、朝早く仕掛けを上げると大きなウナギが釣れた。その時の何ともしようのない満足感が忘れられない。

また、夏本番となると、今度はアユの「かな突き漁」だ。流れの速い瀬を選び、潜って流れながら泳いでいるアユをねらう。長さが4メートルぐらいの竹の先につけた小さな「かな突き(銚子)」で突く。流れの中で小さなアユを突くことは非常に難しい。難しいだけに、獲れたときの喜びはまた格別だ。

この「かな突き」を作るのがまた難しい。裏山で竹を切り、それを火であぶりまっすぐにのぼし、銚子を取りつ



写真2 - 森林をぬうように流れる吉野川の流れ



写真3 - 山林の営みを支える吉野川の流れ



写真4 - 川底の様子まで見える源流域の流れ



写真5 - 川岸を彩るキシツツジ

ける。三十年を越える年月を過ぎた今も自慢の道具は、倉庫に眠っている。

こうした遊びを、今の子供たちはしない。しないのではない、「ワクワク」するような楽しさを知らないのだろう。

いろんな変化があった。テレビゲームなどに代表されるように子供の遊びが変わったこと、過疎化により子供たちが少なくなったことなど、そして子供たちの姿が川から消えた。

5 川の流れも変わった

それでは、川はどうだろう。

吉野川の流れは昔のままです。四季それぞれの美しさを失っていないように見える。しかし、その流れの中には、姿を消してしまった魚、そして新しく仲間入りした魚たちがいる。また、水質や水温、そして水量なども変わっている。



写真7 - 春の流れ キシツツジ

川だけではない。自分たちの生活も大きく変わった。豊かさを実感できる生活が実現し、昔のような生活はしていない。その結果、川とかかわりの深い生活排水ひとつをみても大きく変わった。決してよい変化ではない。

また、ダムもできた。その代表である早明浦ダムは四国の命といわれ、四国四県に多くの水を供給しているが、川の流れにとって決してよい変化ではない。しかし、このダムにより、多くの人たちの生活が救われている。特に、香川県においては、ほぼ全域に吉野川の水が供給され、高松砂漠はなくなった。

このように、川の流れの変化は、一面では我々の豊かな生活を支えている。

しかし、勝手なもので、さらなる豊かさを追い求めながら、川の流れは昔にかえしたい。

そのために、今何ができるだろう。

6 流れを育む森が危ない

吉野川の流れを支えてきたもの、それは自然の営みとして水を生み続ける森林であることに目を向けなければいけない。

源流点を訪ねたことがある。本川村のうっそうとした森林の中でそれは始まっていた。吉野川の源流域は本川村のある「高知県嶺北地域」で、広さは吉野川の全流域面積の四分の一を占め、広大な森林から吉野川の年間流量量の約半分の水を生み出している。

しかし、守り手を失い、手入れされない森林は荒れ放題、昼間真っ暗な森林、下草の生えない森林、表土を失った森林、ついにはがけ崩れにより崩壊した森林が広がり、そこには普段目にするののない森の現実がある。

戦後の経済成長の中で、山村は都会の生活を支える薪や木炭の供給、そしてその原動力となる若い労働力の供給に代表されるように、底辺を支える役目を果たしてきた。

その結果、山村は過疎高齢化が進み、地域の守り手を失った。そして、都市へ供給された薪や木炭の後に植林された杉や桧の森は放置され、危ない森が広がっている。

この森の現実こそが、置き去りにされた山村の現実だ。

唯一の資源である森林の整備にすら力が注げない厳しい現実、過疎、高齢化した山

村社会がそこにある。まずこの現実を多くに人たちに知ってほしい。

7 環境世紀の森

地球温暖化の影響などから環境の問題がクローズアップされている。森林の持つ公益的な機能にも目が向けられ、林野庁の試算では年間74兆9,900億円と国の年間予算を上回る評価がされている。

こうした動きの中で、森林の整備に向けた新しい取組が始まっている。特に高知県では、森林環境税が導入され、全国に先駆けられた取組が進められている。

この取組の基本となるのが、「水や国土を保全する水土保全林」「森林と人の共生林」「資源の循環利用林」の三分区による森林のゾーニングである。

しかし、こうした取組の中で環境林としての整備を強調する余り、最も優先すべき山村社会における経済林としての役割の重要性に対する理解が進んでいないのではないだろうか。「経済性を無視した森林の整備」、つまり人工林の環境財としての多様な公益的機能や山村社会の厳しい現実に目を向けず、自然に返すことが最優先だと主張をする人たちがいる。

自然とは何だろう。

我々も自然の一部だ。山村に人が住み、その人たちの森林を守る日々の営みにより森林が維持されているように、そこに暮らす人々の日々の生活の営みも自然の一部だ。森の営みと一体となった人々の営みがあって、初めて自然が機能しているのだ。

人の手の入らない天然林だけが自然ではない。

今、緊急を要するのは、経済性を無視した森林の整備ではなく、そこに暮らす人々の生活の糧となりうる森林、経済性を兼ね備えた森林の整備だ。

山村の生活の営みと一体となった森林が整備されたとき、山村の持つ多様な公益的機能が持続的に発揮されるのだということを理解してほしい。

8 森を守り、川を守る

川の流れの大切さ、川を育む森の大切さを考えると、中山間地域の大切さがよく分かる。そして、中山間地域を守ること、その核となる森林を守ることの重要性とともに、中



写真8 - 山の悲鳴 崩壊した森林

山間地域の抱える多くの困難な課題が見えてくる。

川に棲む魚の種類が変わっても、そこでの遊びのスタイルが変わっても、そこに暮らす人々の生活の一部として「美しい川」「楽しい川」であり続けてほしい。

そして、源流域において、吉野川のほとりに、その流れを育む森林と一体となった人々の営みが絶えることのない、豊かな地域であり続けることを願ってやまない。

時間はかかるかもしれないが、今、地域の主張を持って取り組まなければ。

子供たちが、川に戻ってくることを願って。



写真9 - 山の守り手 杉の苗木を植える